

近代における漢字文化新分野の形成 —— 文義謎を例として ——

呉 修喆

はじめに

(1) 文義謎とは

中国における「謎」というもののうち、漢字の表意文字としての特性を生かし、漢字の音・形・義を利用して文学的に書かれた謎がある。そのルーツは先秦時代の隠語と言われ^①、漢字の特性が介在することによって、一種の隠喩的話術から次第に文学的趣向を持つものへと変化した。その中、特定作者の作品として、「離合詩」という文学形式が発生し、文学的な謎と、現象的な事物の名称を当てる「事物謎^{じぶつめい}」とを分ける分岐点となった。「謎」という漢字は、その両方を包括的に表す概念として、魏晋南北朝に創られたが、そのほかの名称として、口承的な謎（主に事物謎）と区別できるように、その伝播のあり方を表す「燈謎^{とうめい}」^②や、その文学的性質を表す「詩禪」^③や「文虎」^④などが次々と発生していった。これらの名称を簡単に表に整理すると、以下のようになる。

時代 \ 性質	事物を答えとする 事物謎	漢字の特性を利用 した文学的な謎
先秦	隠語・讒（いん）・慶辞（そうじ）	
前漢	射覆	
後漢		離合詩
魏晋南北朝	謎・謎語（めいご）	
宋		燈謎
明		文虎（燈虎）・詩禪
清		春燈

このように、時代につれ、文学的な謎の呼称が少しずつ特化されてきたことは明らかである。筆者はここで便宜上、漢字の特性を利用して文学的に書かれている謎のことを総じて「文義謎」と称することとする。文義謎がどのように言語遊戯から発生して文字遊戯として独自の形式を確立したかについては、拙論^⑤の中で既に詳述したので、ここでは説明を割愛するが、文義謎の発展の流れには簡単に触れておこう。

文義謎がどんな謎なのか、一つ簡単な例を挙げてイメージを提示するのは無論可能である。ただし、各時代の文義謎はその発展段階によって、形式も技巧にも何らかの変化が見られる。最初の一例は以下の通りである。

二形一体，四支八頭，四八一八，飛泉仰流。^⑥

答え：井

(南朝宋・鮑照)

解釈：「二形」とは、縦と横の二種類の形を指しており、それが一体になって「井」の字を表す。「四支八頭」とは、「井」の字が持つ4本の線と8個の端を表している。「四八一八」は、4つの「八」と1つの「十」を併せて5つの「八」、すなわち「五八」を意味し、掛け算すると「四十」となる。4つの「十」の字を並べると「井」の字になる。「飛泉仰流」は、水が汲み上げられる時の井戸の様子を比喻している。

これは南北朝時代の詩人である鮑照^{ほうしやう} (420年頃-466年)の「字謎」^{じめい}と題した三首の詩の内の一詩であり、最も早く明確に「謎」と表記した文学作品として知られている。鮑照の字謎は、文義謎発展の第一段階の典型と言えよう。最大の特徴は漢字を全体的に観察し、文字の構造を文学的に表現することである。続いて第二段階では、漢字の偏旁や字形の細部を解体、消去、また組合せるといった「離合」の手法を使うものが多い。そして、第三段階では、字形の近い漢字を連想させ、文の中に更にトリックを仕掛けるものが多いと見られる。総じて見ると、草創期の文義謎は直観的で素朴なものが多いのに対し、その後は徐々に迂回し、複雑なものとなっていったことが分かる。また、最初は識字階級である文人の間でしか行われていなかったが、時代につれ、市民文化の振興に伴い、下流社会へと降りて伝播される傾向、いわば一種のエリート文化が庶民文化に転じる傾向が見られる。この転向は唐代から始まり、明清時代に最も顕著になった。

しかし、清末になると、完全に自作詩文で書かれる文義謎は減り、典故名文、特に儒教経典を用いて、ひいては典故の成句を問い(以下「謎面」と呼ぶ)と答え(以下「謎底」と呼ぶ)の両方にそのまま利用する形式の文義謎が徐々に増えてきた。文義謎発展の第四段階に入ったと言えよう。何故このような変化が起こったのかは本論で詳述することになるが、大まかに言うと、エリート文化の代表である儒学経典の下層への普及化現象と、清末においてついに廃止された科挙制度とに深い関係が見られる。

(2) 問題意識

上述のように、文義謎は科挙時代の伝統的教養及び他の正統的な文学ジャンルから栄養を受けながら、清末民国期にその最盛期を迎えた。清末から民国期にかけて、各地で大規模な文義謎社団が結成され、出版された文義謎の関連書籍の数も最多記録に達した。さら

に、科挙の歴史が幕を閉じた後には、詩詞に関する評論である「詩話」や「詞話」を模した「謎話」という新しい文学ジャンルも現れた。文義謎作品の評論を始め、創作理論に関する議論や新しい形式への模索なども謎話の中に見られる。「謎話」の誕生は、文義謎が漢字文化における新しい分野として確立されたことを意味するのではないかと考えられる。

したがって、本論の研究対象は、古くから伝わってきた歴史長き文義謎そのものではなく、清末民国期のような新旧文化の転換期において、文義謎が漢字文化の新分野として形成されていく過程となる。

この過程は中国近代文化の一齣として、鮮明な時代的特徴をも現している。しかし、謎話が誕生する以前の各時代にも、文義謎というものの存在は知られていたにも拘わらず、なぜそれを既成の「分野」と定義しなかったのか。また、なぜ「新しい文学ジャンル」ではなく、「漢字文化の新分野」と称する必要があるのか。以上の疑問点を踏まえた上で、清末民国期の文義謎の実態を考察し、分野形成に拍車をかけた実践者（以下「謎人」とする）はどのような社会階層に属し、どのような特徴を持つのか、彼らは当時の文義謎にどんな新しい変化をもたらしたのか、分野形成にとって決定的な要素は何だったのかという問題点を検討したい。

(3) 先行研究

1907年から日中戦争が始まる1937年までの30年間、数多くの謎話作品が雑誌に掲載・出版され、文義謎の歴史においてブーム的發展を見せたが、1937年以降は戦乱や文革、社会主義的政策などが原因で、文義謎の發展は長い冬の時代に入った。そして、再び大衆の視野に入ったのは1980年代ごろであり、当時の「文化論ブーム」を背景に、全国各地（台湾・香港・マカオを含め）で新しく「燈謎」社団が結成され、文義謎愛好家の交流が一時期盛んになっていた。もっとも彼らの努力によっていくつかの資料集が出版されたものの、学術的研究は未だ殆ど着手されておらず、先行研究が少ない状況が続いている。

海外において文義謎を取り上げた極く少数の論文としては、Richard C. Rudolph, “Notes on the Riddle in China,” *California Folklore Quarterly*, Vol. 1, no. 1, January 1942, pp. 65-82 が特に参考価値が高い。当該論文自体は中国における事物謎・文義謎及び藏頭詩⁷⁾などの文字遊戯に関して、大雑把な紹介しか行っていないが、時代的に民国末期に発表された論文であり、引用した参考文献には清末民初のものが多い。その中では中国語の文献のみならず、清末民初に外国人研究者が中国の「謎」について書いたものにも触れている。そのような文献の分量は多いとは言えないが、興味深いことに、文義謎も当時においてシノロジーの研究対象として取り上げられていたのである。例えば、鈴木虎雄「支那文學における語戲」⁸⁾や那波利貞「元宵觀燈」⁹⁾など、日本人研究者の文章もRudolphに取り挙げられていた。その他、近藤空の『支那學藝大辭集』が燈謎の24種の「謎格」について書いて

いる⁽¹⁰⁾ことも Rudolph に引用されている。Rudolph が「謎は長い歴史を持ち、伝播範囲も広いが、中国人は最近になってからやっとそれに関心を持つようになった。このような軽視を招いた理由の一つは、通俗文学に低い評価を為すという中国学者の伝統があったからである」⁽¹¹⁾と述べているように、こうした「軽視」も文義謎が近代になってようやく分野として成立する理由の一つとして考えておく必要がある。

一 「古体」から「今体」へ

「成句典故謎」が清末に主流となる以前は、文義謎の大半が口語的な言葉または古詩の形式を取る「古体謎」と呼ばれる様式であった。それに対し、清末民国期の謎人は自分らが創作する文義謎のことを「今体謎」と呼んでいた。

「古体」と「今体」の繋がり及び区別について、錢南揚の『謎史』は、

元代から始まった独脚虎⁽¹²⁾というスタイルは既に現在の謎に近い。徐渭が書いた「他」と「佯」の字謎は現在の謎と殆ど同じスタイルである。現在の謎のスタイルは、元・明の際に創始され、清の中葉になってようやく流行し始めたのである。古人の隠語は、格律というものはなかったが、今体謎が盛んになって初めて格律を言うようになった。⁽¹³⁾

今体の謎が流行してからは、古体の謎が下品なものとして看做され、士大夫の口から出なくなっている。⁽¹⁴⁾

と述べている。ここに見られる「今体」謎の二大特徴は、「格律（決まった形式と音韻）」と「上品さ（文学的価値の高さ）」と言えるだろう。『謎史』が指摘したように、「今体」謎の源流は実は清末からではなく、元代・明代からすでに見え始めていた傾向であり、明末の徐渭（1521-1593年）が創作した字謎というのが典型的な「今体」スタイルの始まりであった。徐渭の『徐文長逸稿』にある、以下の謎を見てみよう。

他字 問管仲

解釈：『論語』「憲問第十四」にある「問管仲，曰，人也」⁽¹⁵⁾との一文から、「人」と「也」の組み合わせで「他」の字と解く。

佯字 何可癡也，以羊易之

解釈：この一文は『孟子』「梁惠王章句上」にある⁽¹⁶⁾。「何」の中の「可」を癡して、「羊」の字と取り替えると「佯」になると解く。

この二題の字謎⁽¹⁷⁾が『論語』『孟子』といった儒家經典の成句を謎面にした最も早い例だと思われる。一方で『徐文長逸稿』に書かれている謎の中には、「今体」の始まりと思われる「他」「佯」字謎の他に、実は次のような「古体謎」もある。

秦字 二画大，二画小。

解釈：「秦」の字形を「二」「大」「二」「小」と分割できるからである。

用字 上有可耕之田，下有長流之川。一月復一月，兩月共半邊。一字共六口，兩口不團圓。

解釈：「用」の字形を「田」「川」，または「月」「月」，または6つの「口」（下の2つは口が閉じられていない）と分割できるからである。

したがって、徐渭の文義謎作品は正に古今の作風の交差点に立っていると感じられる。なぜ徐渭の作品にこのような変異が見られるのか。徐渭の生きた時代、文義謎はどのようなもので、どのように伝播していったのだろうか。

その様子はいくつかの筆記から垣間見える。例えば、明代の田汝成（1503-1557年）の『西湖遊覽志餘・卷二十・熙朝樂事』には「正月十五日が上元節であり、その前後の五夜に燈籠を掲げる。（中略）物好きらは蔵頭詩などを書き、人に当てさせるが、それを猜燈と謂う」⁽¹⁸⁾とある。さらに、時代はやや遅れるが、明の劉侗（1593年頃-1637年）は『帝京景物略』に、「お正月の八日から十八日、人々は東華門の外に集まり、燈市を行行。詩で物の名を隠して寺院や道観の壁に掛けるのがあり、商燈と曰う」⁽¹⁹⁾と書いている。「商」とは、「協商」のように、「打ち合わせ、相談」を意味する。つまり、燈籠に書かれた謎をめぐって、皆で論じ合うことである。また、明末の張岱（1597-1679年）の『陶庵夢憶』には、

道の辻に木の棚を組み立てて、大きな燈籠を掛け、俗には呆燈と言ひ、上に四書や千家詩の故事或いは燈謎が書かれている。人々はその周りに立って謎当てを試みる。考証できる由来としては、概ね宋代から謎を燈籠に貼って元宵節の街を飾ることの影響があり、元明以降は遂に風習となった。⁽²⁰⁾

とある。以上書かれている明の燈謎民俗の中には、今や「謎」とは言わない、蔵頭詩といった文字遊びの類いも含まれるのだが、徐渭以降の時代になると、「今体謎」と似たような四書五経と関わる文義謎も見られたという。

徐渭は主に王陽明（1472-1528年）の弟子である季本（1485-1563年）、王畿（1498-1583年）から学問の伝授を受けていたため、学問的には顕著な心学的特徴と、複雑な学問を簡素化する傾向、そして文化的陶冶に重点を置く自然派的な文学観・芸術観を持っていた。彼は非

常に多才な人物であり、書道をはじめ、詩、文、絵画などの造詣も深く、戯曲作家としても名高く、経学研究には『四書解』があり、仏教研究には『首楞嚴經解』、道教研究には『莊子注』があるほど、学問は儒・釈・道を全面的に渉猟している。さらに、中年になってから黄老の術に関する研究にも没頭し、49の年に獄中で煉丹術の經典とされる『周易參同契』の注を書いた。

その『參同契』の作者である「魏伯陽」が自分の名前を文の中に隠した⁽²¹⁾のと同じように、徐渭は隠語の「秦囚田水月」を使ってその『參同契』の注釈本に署名した。「秦」は「徐」の字形を変換したものとされ、「田水月」はつまり「渭」の字を3つのパーツに分解したものである。「田水月」を自らの号とするのはこれが始まりだったという⁽²²⁾。彼の作品などを精読すれば更なる手がかりが出てくると思うが、ここで初歩的な推論をまとめてみると、明末の正統学術である陽明学の禅学的性格を受け継いだこと、老荘思想に深く影響されたこと、多分野に亘る知に対する好奇心、そして大衆文芸に対する熱意などが併さり、彼の燈謎作品に新しいスタイルを誕生させたと言えるのではないだろうか。

また、『徐文長逸稿』は張岱によって編集されたが、天啓3年(1623年)に刻印された後間もなく、崇禎年間(1628-1644年)に完成した謎集『廣社』の序文にはこう書いてある。

思うに『三墳』『五典』『九丘』『八索』⁽²³⁾、諸子百家及び稗官野史⁽²⁴⁾は、一万字か数万字、ないし数千百万字の長さに拘わらず、皆「商謎」を為している。上古の時代には、結繩して政をすることはまさに「謎」である。後世の凶史・策籍・紀伝・注載⁽²⁵⁾などは、古人が検討したものを整理し明らかにするに過ぎず、ほんとうは世間のためになる新たな「謎」を一つも創っていなかった。堯は舜に帝位を譲り、舜も禹に帝位を譲ったことで、万仞なる峰から「謎」の発端を立ち上げたのだから言えよう。(中略)読めば、字義の説明解釈がされており、人の心の奥まで洞察できる「日月燈」「照乘珠」「光明藏」の如く、簡単でありながらも奥深い意味が秘められている。⁽²⁶⁾

この序文を読んで分かるのは、どのようなものが文義謎として主流なのか、明末の文人にとっては恐らく問題にならなかったことである。文義謎のあるべき姿や創作理論、評価基準などには関心が寄せられていなかったものの、「謎とは何か」という価値の問題については既に議論が行われていた。それ以前の謎書、例えば、宋代の周密『齊東野語』の「隠語」篇なども文義謎の歴史をできるだけ遡ってはいるが、「謎」そのものの価値についての議論は殆どなかった⁽²⁷⁾。明代李開先の『詩禪』のほうは文義謎の伝播を「禪家の傳燈」と比喻したが、それは手法から出発しているものであり、「詩禪」の思想性についてははっきりと説いていない⁽²⁸⁾。だが、ここでは「思うに『三墳』『五典』『九丘』『八索』、諸子百家及び稗官野史は、一万字か数万字、ないし数千百万字の長さに拘わらず、皆「商謎」を為している」と、初めて經典を「謎」と同列視したのである。この叙述には、文人が「謎」

を「俗」から脱出させようとする意欲が強く見られる。徐渭の作品と関係があるかどうかは断言できないが、ここから、一気に文義謎の意味づけが変わってしまったことは明らかである。

もともと、明末の徐渭が開いた「今体謎」の流れは一旦途絶える。「清初の謎語は、元・明の伝統を受け継ぎ、同治光緒年（1862-1908年）以降の流れの端緒を開いた。例えば毛際可の『燈謎』、周亮工の『字觸』、黄周星の『度詞』及び錢德蒼の『解人頤』、咄咄夫の『一夕話』に見られる謎はまだ元・明の古い作風を改めていない。その他、雑記などに書かれている謎もまた古体のものが多かった⁽²⁹⁾のだ。しかし「同治光緒年以降」という清末時期になると、再び「今体謎」が現れるようになった。その背景には、乾隆・嘉慶（1736-1820年）の治世に、経学の精密化をめざす学術運動が展開し、博識に養われた鑑識眼をもって個別事象の確定を追求する学風が形成される中⁽³⁰⁾、同治・光緒年になると、清学の衰退期⁽³¹⁾に入り、市民文学に更なる発展が見られたことがあった。明末と似たようなデカダンスの時代的雰囲気醸成されたため、当時の士人が頻りに明末の文化を見つめなおしたという現象もあったと言われる⁽³²⁾。

上述のように、清の中葉以降から、文人氣質の強い「今体謎」が徐々に流行し始めたと言われるが、「今体謎」を主流的地位へと導いた人物とせば、清末学术界において名高い俞樾（1821-1907年）であろう。その直接の原因は、彼が光緒6年（1880年）に『隱書』という文義謎集を出したことである。『隱書』は後に俞樾の『春在堂全書』の「曲園雜纂」部に編入された。俞樾もまたその博学多才によって世に知られており、考証学以外に史学や詩文学、小説、戯曲、書道など数多くの分野で深い造詣を見せているので、徐渭と気質的に似ているところがあると言えよう。

『隱書』の序文は非常に短く、最初は「隱書」という書名の由来を「漢書藝文志に隱書十八篇⁽³³⁾があり、隱書は書としての歴史が古い⁽³⁴⁾」と説明している。そして、「余は齊贅⁽³⁵⁾のように滑稽な弁舌はないが、秦客のような瘦辞のころ⁽³⁶⁾は極めて多く持っている。文人の遊びなので、博奕のような遊びをするより賢いだろうと考えて、この一編にまとめてみた。『千字文』⁽³⁷⁾の文字順で並べ、先に題目を出して、本編の後に解答を書き、好事家に贈る⁽³⁸⁾」と、中に載っている文義謎がすべて自作であることを表明している。序文がそう書いているように、中身は題目と解答が順番に並べられているだけで、解くためのヒントや注釈などは一切入っていない。典型的な例を2つ挙げよう。

君使臣，臣事君，如之何 唐人名一 宋之問

解釈：『論語・八佾』に「定公問，君使臣，臣事君，如之何，孔子對曰，君使臣以禮，臣事君以忠」がある。魯の定公は名を「宋」と言うことから、唐代の詩人である「宋之問」と解く。

不愁明月盡，自有夜珠來 唐人名一 沈亞之

解釈：宋代尤裘の『全唐詩話』巻一に、唐の才女上官昭容は宋之問の詩にある「不愁明月盡，自有夜珠來」が沈佺期の「微臣雕朽質，羞覩豫章才」より優れていると評価した、と書かれている⁽³⁹⁾。「沈」佺期の詩が宋之問のこの二句に比べて劣る（漢字の「亞」は「劣る」という意味があるため）と意味を読み取り、同じく唐代の才子と知られる「沈亞之」の名前と解く。

当時の文人にとって、科挙教育から得た伝統的教養を運用すれば、この謎を解くのはそう難しくないだろう。兪樾が実際に創作したと見られる文義謎は僅か100題⁽⁴⁰⁾だが、殆どはこのような伝統的教養の特色が非常に強い作品であった。解くには謎面の出典を素早く思い出し、前後の文章を暗誦し、関連知識を持ち、且つ多義的な漢字を正確に理解できるという複数の素養を同時に身につけていなければならない。これらの謎を読むと、考証学者でもあり、文学者でもある兪樾が彼にとって日常的な知識を、遊び心を込めて新たに組み合わせる情景が窺える。

彼の学術的人生を通してみると、文義謎を僅か100題しか収録していないこの薄い冊子がどの程度に彼の関心を反映しているのか、論証するのは難しい。しかし、彼が清末民国期における文義謎の流行に与えた影響の大きさは、その後の出版事情から窺える。例えば、光緒12年(1886年)に、『隱書』と同じ出版元の梅華館から「兪樾撰」と署名する『燈謎新編』が刊行されたが、兪樾の『春在堂全書』には収録されず、作者の真偽は定かではない。また、中国国家図書館蔵目録によると、「兪樾輯」と署名されている『新編燈謎大觀』が光緒30年(1904年)に上海書局により出版されている。『新編燈謎大觀』二巻、続集二巻のタイトルが『謎史』にも挙げられているが、錢南揚の説によると、それは恐らく「坊本」⁽⁴¹⁾であり、兪樾の名を偽託した疑いがあるという⁽⁴²⁾。さらに、民国6年(1917年)に出版された、当時上海最大規模の文義謎社団であった萍社の謎集『春謎大觀』には、「兪曲園」と署名する作品が合計848題ほど入っているが、調べると、極く一部の初出不明の作品以外、殆どが上記の『新編燈謎大觀』からそのまま転載されたものである⁽⁴³⁾。『春謎大觀』は民国6年1月に上海文明書局により出版された後、民国24年(1935年)5月までに計10版刊行された。具体的な発行部数は把握できないが、かなりの影響力があったと推測できる。このように兪樾に仮託して出版された謎集が多かったこと自体、彼が文義謎流行の発生に大きく寄与していることを示しているのではないだろうか。

二 科挙廃止による教養無力化の一表象として

清末社会において文義謎を推し進めることはどんな意味を持つのか。それを明らかにするには、先ず、文義謎の潜在的受容層がどれくらいの範囲であるかを考察しなければなら

ない。前節で述べたように、複数の古典教養を同時に身につけていることが文義謎を行う時に要求される。これらの素養と科挙を受けるために必要な学力とが一致することは説明不要かと思われるが、科挙の試験準備においても、古くから文義謎と類似する要素がいくつも含まれていたことは一般に知られていない。一言で言うと、「博学」が考証学者にとっても科挙に挑む士人志望者にとっても、最も重要な判断基準であった。そして、その博学を目指す最初の一步が、経典本文及び注疏の暗誦である。

本文の暗誦はもちろん、幼童時代に私塾で叩き込まれる学習の基本中の基本であり、本格的に受験勉強に入ると、規定された経注も本文と一緒に暗誦しなければならない。それに伴って試験の方法として「帖経^{じょうけい}」というものが使用されるようになった。「帖経」とは経書の本文もしくは注の中から、任意に三字を張り紙して隠し、その行一行、もしくは前後あわせて三行を示して、隠した文字を言い当てる方法である⁽⁴⁴⁾。ちなみに、この「帖経」と似たような文義謎に、1918年前後、上海などの地域で流行していた「敲詩」或いは「打詩室」と呼ばれるものがあつた⁽⁴⁵⁾。また、科挙の試験場で題目に応じて書いた詩のことを「試帖^{しじょう}」と呼ぶが、これにもまた文字遊戯的要素がしばしば見られるのである。周作人(1885-1967)が「試帖について」という雑文の中で、

民間にある対聯、謎語及び詩鐘など全てが試帖と関連していることは、前人に指摘されたことはなく、私の発見と言えよう。中国は古くから文字の国と称されてきたから、確かにこの類のトリックに関しては非常に精巧である。普段でも楽しんで疲れ知らずにやるから、まして名利の誘惑があればなおさらのことだ。精神や思考の限界を尽くしてやらないはずがないだろう。⁽⁴⁶⁾

と述べている。「前人」は確かに、民間にある文字遊びを科挙と繋げては論証しなかったと思うが、こうして試帖を通して見れば、科挙のために身に付けた教養があつたからこそ文義謎は成り立ったことが分かる。そして、文義謎は何らかの形で科挙試験の教養にフィードバックされている、と言っても過言ではないのである。

しかし、1905年に科挙が廃止され、曾て儒家経典を中心としていた士人の教養は一気に地位を失っていった。科挙制度によって古くから形成されていた地域のエリート層がまず崩壊し、知識人がその危機的状況に対処するためには、「手持ちの旧中国の遺産を食いつぶさざるをえなかった」⁽⁴⁷⁾のであつた。科挙の代替物として新式の学堂が設置されたが、儒家的伝統教育を近代的教育に変えたのは、最初は形だけであつた。とはいえ新式の学堂には、伝統的知識人全員を受け入れるほど大量の就職口があつたはずはないため、残りの人はやはり新たな活路を拓くほかなかつた。行き場を失った知識人は新聞・法律・医療・文芸などの自由業に従事するようになり、近代的文化産業を支える最初の専門人材となつた。その中で多くの若い知識人は文学の道を選び、まさに文字を売って糧を得る人が出

てきたのである。彼らが文学を選んだのは、個人的な選択ではなく、時代や環境など色々な影響が合わさった結果であり、「士人」から「文人」への役割転換とも言える。科挙が廃止された後を生きる晩清の知識人にとっては、文学が生計を立てる残り僅かな手立てとなっていたのであった。

科挙の時代が幕を降ろして間もない頃は、彼らに確実に不応期があったはずであり、その不応期におけるストレスを解消する一つ的手段として、彼らは昔と同じように熟知した儒家経典を使い、文義謎を用いて知恵を競い合ったのではないだろうか。やがて、知識人らが地域社会から離れて都市に集中するようになってからは、人数・規模・活動方法すべてにおいて旧時の地方謎社から飛躍的に変化した近代的謎社が各主要都市にできた。清末民国期の最も有名な謎社は南北二大都市に位置し、活動方式及び発展状況にそれぞれ鮮明な特徴を持っていた。北京では、いわゆる文人・学者気質を帯びた活動が展開され、文義謎創作が盛んに行われ、新しい文体形式の模索や創作理論の検討などが積極的になされ、文義謎そのものの進化を促した。一方、上海では新聞・雑誌・単行本・小型新聞（俗に「赤新聞」とも言う）などの出版業が非常に盛んに発展していたため、特に市民社会の中層を大きく占めていた旧知識人より転身した近代的市民知識人が、開港された近代都市で発達しつつあった大衆娯楽施設・マスメディア・出版業を利用し、伝播・伝承の面において、文義謎の従来のある方を著しく変化させたのである。

三 活動方式の近代化

本節では清末上海における最大の謎社「萍社」を例として考察し、近代における文義謎活動の新しい変化を捉えたい。萍社の創立者で、同時にその中心人物でもあった孫玉聲（1864-1940年）は、当時名高い小説家かつ小報文人（小型新聞に投稿する文人）で、1889年に新聞報に入社、1891年には編集長に昇任し、一時期『字林滬報』の副刊⁽⁴⁸⁾である『消閑報』の編集も兼任していた。『消閑報』とは、光緒23年（1897年）に上海で創刊された文芸副刊であり、文義謎を掲載した最初の新聞として知られている。新聞や副刊、小型新聞などに載せられていた文義謎は愛好者の目を引き、投稿によって積極的に応答・議論されることで、徐々に愛好者の輪が広がったわけである。愛好者らが国内の様々な地域^{うきくさ}から萍のように集まってきたことを意味して、「萍社」と名付けられたという。

鄭逸梅の『梅庵談薈』によると、萍社は光緒33年（1907年）に創立され、最初は上海の三馬路（現在の九江路）にある「文明雅集」という茶室で活動していた。創立されてから8年後の1915年に、上海最初の遊楽場である「樓外樓」の所有者・黄楚九が静安寺界限により大型の娯楽施設「新世界」を開き、燈謎を遊楽場の催し物の一つにするため、孫玉聲と萍社社員を「新世界」に招聘、毎月の15日に遊楽場内で燈謎を貼り、お客に当てさせていたという。その後、「新世界」は経営陣の紛争により所有者が変わり、萍社も一時期福州路

と湖北路の交差点にある「繡雲天」という小さい遊楽場に移った。のち、1917年に「新世界」の元所有者である黄楚九が復活し、「新世界」の約二倍の広さを持つ、当時東洋一の規模を誇る遊楽場「大世界」⁽⁴⁰⁾を開設したことによって、該社の活動の場もそこに定められた。孫玉聲は黄楚九に高額報酬でヘッドハンティングされ、黄に協力して遊楽場新聞『大世界』を創刊することになった。『大世界』新聞の中にはコラム「文虎」があり、毎日のように文義謎が掲載され、次の日に前日の解答である謎底とともに新しい謎が出されていた。また、「大世界」の中に「文虎台」と命名する一室が設けられ、毎晩のように燈謎イベントが行われ、謎が解けたお客に遊楽場の入場券や煙草、文房具などの景品を渡していたという⁽⁴¹⁾。

萍社が「大世界」に場を移したのと同じ1917年に、王文濡は萍社会員作品集『春謎大観』を編集し、進歩書局から出版した。兪樾の名に仮託し、萍社と関係のない謎人の作品も『春謎大観』に多数編入するという不適切な編集行為もあったが、彼の出版活動によって、萍社の名が世に広く知られ、会員の作品が伝誦されるようになったのも事実である。このように、「大世界」時代に萍社は発展の頂点を迎えた。その前から既に実力のある会員が相当集まっていたが、さらに鴛鴦蝴蝶派⁽⁴²⁾の代表小説家である徐枕亞(1889-1937)が加わり、前後合わせて計90人が萍社に参加したのである。萍社は「大世界」で4年間活動しつづけたのち、主要会員が逝去し、多くが上海から離れたことにより、創立から14年が経った民国10年(1921年)に解散の時を迎えた。その後、1928年に大中虎社が成立し、孫玉聲、徐枕亞も含め、萍社の元の会員が多数参加した。彼らは、それまでのように文義謎が各新聞、雑誌、小型新聞に掲載させるだけでは発展が限られるため、文義謎及びそれに関する創作談などの文章をまとめて掲載する専門誌が必要だと感じ、『文虎』と命名する半月刊を発行した⁽⁴³⁾。

既に前文で一部紹介したが、補足として、清末民国期における文義謎の掲載・出版事情を説明すると、鈴木虎雄の「文字の國(文字に関する支那人の日常生活)」に、「今や上元燈の風俗は漸次棄たれたるが、謎の解を求むるものは新聞紙上にて盛に行はる」⁽⁴⁴⁾と書かれている。このように、かつてのような、特定の時間に特定の場所へ行かなければ謎当てイベントに参加できないという状況を打破したのは、新聞・雑誌などの近代マスメディアであった。小型新聞の『消閑報』をはじめ、『金剛鑽』や娯楽施設新聞の『大世界』以外にも、上海の『文社日報』や『申報』、天津で創刊された『大公報』などにも文義謎が掲載されていた。蘇州出身の謎人・張玉森が編集した謎集『百二十家謎語』の中には、1906年以前に新聞・雑誌に載せられた文義謎が「文社日報謎鈔」「申報館謎存」「消閑報謎存」「新小説謎剩」「大公報謎鈔」と五編に分けて蒐録されている⁽⁴⁵⁾。雑誌に関しては、梁啓超(1873-1929年)が主催した『新小説』は特に影響力が大きかった。また、『小説月報』のほうは、「編輯大意」に「後ろの部分には訳叢・雜纂・筆記・文苑新智識・伝奇・改良新劇の諸類を付け、説部の範囲を広め、報余の採集に助す」⁽⁴⁶⁾という創刊の目的が書かれている。張起南

の自作謎集『たくえんいんご棗園隱語』は、1918年11月から『小説月報』第9巻第11号・12号と第10巻第1-3号及び11号の「文虎」欄に連載されたものである。謎人同士の間でしか流通しない謎集と違って、月刊誌連載の場合は、張が一部の謎面・謎底に注をつけ、更に連載第一回に登場させる謎に簡単な説明もつけ、素人や初心者向けの工夫を加えている。そして、前述したように、文義謎発展の停滞期に入る直前の1930年代に、ようやく文義謎の専門誌『文虎』ができたのである。

このように謎人らは大規模な謎社を組成し、近代都市における娯楽施設やマスメディア、出版業など利用して文義謎の新たな伝播形式を試み、愛好者同士で文義謎創作の交流を行うことでその進化をはかった。また、謎話という文学ジャンルを開いて、創作理論の検討及び外来文化を使った新式謎の模索など、文義謎の可能性を探っていたのである。

四 主体性の向上

近代的文義謎活動の中で登場したこの「謎話」という新しい文学ジャンルは、謎人及び各地における文義謎活動の紹介、作品の評論、文義謎の創作理論を主な内容としている。それは文義謎という漢字文化の新分野が確立したことを意味する。筆者がこのように考える理由は、謎話を通して謎人全体における創作者の主体性の向上が見られるとともに、作品の独自性や審美性、謎人のアイデンティティをめぐる議論などもその中に多々見られるからである。

「詩には詩話があり、詞には詞話があるが、謎には謎話がなかった（詩有話、詞有話、而謎獨無話）」⁽⁶⁾ ことが意識されたため、光緒33年（1907年）に書き上げられた亢聘臣の『紙醉廬謎話』をはじめ、民国期の20世紀30年代までに、謎話本が数多く出版された。標題に「謎話」或いは「春燈話」などと表記し、かつ掲載時期・出版年が分かるものだけでも、以下の作品がある。

- ・1907年に書かれた亢聘臣『紙醉廬謎話』。1919年『紙醉廬春燈百話』と改題して敝社より出版（以下一部『紙』と略記）。
- ・1908年、古銘猷こめいゆう「謎話」、『國學萃編』第1期・第2期に連載。⁽⁵⁷⁾
- ・1912年に書かれた薛鳳昌せつほうしやう すいふんさいめいわ『遂漢齋謎話』、商務印書館、文藝叢刻甲集、1917年（以下一部『遂』と略記）。
- ・1915年に書かれた張起南の『棗園春燈話』商務印書館、文藝叢刻甲集、1917年（以下一部『棗』と略記）。
- ・1915年、慧因えいん「製謎叢話」、會心齋主人「文虎叢話」、莫等齋主人「燈猜叢話」、『中華小説界』第1巻第1・2期。
- ・1917年、周効璘『慧觀室謎話』上海廣益書局、古今文藝叢書第一集。

- ・1921年、韓振軒『小瑯嬛仙館謎話初集』雲龍霧豹社。
- ・1924年、錢南揚「新年謎話」「春燈餘話」，雑誌『半月』。
- ・1929年、謝會心『評注燈虎辨類』（出版社不明）。
- ・1930年、謝雲聲『靈簫閣謎話初集』廈門新民書社。
- ・1931年、孔劍秋『心向往齋謎話』（出版社不明），李笠僧『談虎百則』（出版社不明）。
- ・1937年、吳克岐『大窩謎話』廣陵古籍刻印社。
- ・1939年、謝會心『輟耕談虎錄』（出版社不明）。

このほか、翁松蓀の『松廬謎話』、陳亦陶の『槐簪謎話』、老陳の『老陳謎話』⁽⁶⁸⁾、徐枕亜の『談虎偶錄』⁽⁶⁹⁾、李鳴秋の『謎話』、彭作楨の『翹勤軒謎話』、張靜庵の『繡石廬謎話』、陳屯の『習隱廬度詞叢話』⁽⁷⁰⁾などが民国期に出版されたものとして知られている。

亢聘臣の『紙醉廬謎話』は書き上げられた時間から見れば最も早かったものだが、完成した後すぐには出版されなかったため、『橐』と『邃』の二作ほどの影響力には及ばなかった。龐俊という人が1919年3月に『紙』のために書いた跋文に、

しかし、上海では『邃漢齋謎話』『橐園春燈話』などの謎書が既に出版され、論説においては亢のものと同重なるところもあり、亢も余計な出版を取りやめようとし、人に見せることもそれ以来しなかった。『邃』『橐』が既に流行しているのだから、人にそれらを踏襲した作だと思わせたくなかったからである。しかし、私が『紙』を読んだのは他の書が出版される前であり、内容が少し重なるのは、古今においても例が多いことだ。⁽⁶¹⁾

と述べている。要するに、謎話作者は、相互の作品に対する認識が異なっていたにも拘わらず、当時の謎話本は論点から内容の並び方まで類似するものが多かったということである。例えば、燈謎の進化段階を論ずる時は、最初は字句の増減（離合）、次に典故の考拠、また次に「白描」⁽⁶²⁾、最終段階が典故と「白描」技法の併用であるとするものが多い。謎の審美的価値を論ずる時は、字句の増減を用いたものを最下位とし、典故を考拠したものは「能品」、白描を用いたものは「妙品」、典故を借りつつも「白描」をするものは「神品」と順位付けされるべきだと論じるものが多い。

「白描」というキーワードは『紙』のみならず、古銘猷「謎話」と薛鳳昌『邃漢齋謎話』にも出ており、具体的にどのような手法なのか、次に例を挙げる。

夢 四書一句 覺後知（『孟子・万章章句上』）

鬚 四書一句 唯女子與小人爲難養也（『論語・陽貨』）⁽⁶³⁾

このような、漢字一文字を謎かけにするものが典型的である。謎面が極めて単純なため、典故を使うことも文学的に描写することもできず、すべて漢字の音・形・意から推理しなければならない。ここでは、「夢」だと分かるのは目覚めた後、「鬢」は女と子供には生えないという意味で謎底の四書の句と解くのである。この二題は元聘臣が『紙醉廬春燈百話』に書いている「演繹法」の例にもなる。簡単に言えば、「白描」とは、謎かけの部分に当たる語句の背景（典故の出自などの関連知識）を利用しなくても、文字だけを頼りに、純粋な論理的な仕掛けをする手法である。そういう意味で、確かに一種の究極的な技と言えよう。

『紙』の独自の特徴を言えば、作者の自作文義謎が極めて少なく、それに対し、他の謎人の作品を大量に記載しているところである。大量の謎集を読破し、周りで活躍する多くの謎人の謎例を分析した上で練り上げられた、という印象が非常に強い。また、既成の文学ジャンルである「詩話」から借りた観点も見られる。例えば、『滄浪詩話』から取った「別才別趣（一般の学問とは別の才能や趣）」⁽⁶⁾は文義謎にも当てはまると称している。さらに、科挙で行う経義と策問の試験問題も一種の文義謎と言え、「幼い頃は経書を暗誦するのが苦手であり、文義謎を創作し始めて以降は大量に読書するようになり、経書原文に深い記憶ができ、科挙試験に役に立った」と、科挙試験と文義謎の相乗効果についても述べている。「演繹法」「帰納法」といった近代的論法を用いて文義謎の技法を分析するところが非常に興味深い。

清末民初期に出版された謎話本の中で、最も代表的なのは張起南の『橐園春燈話』である。張起南(1878-1923年)は、字は味鱸、号は橐園、福建省永定県出身の謎人である。73,000字という文字量は当時ほかの謎話本を遙かに超え、創作理論を説明する際に例として挙げられる自作文義謎も3,000題ほど書かれている。『橐園春燈話』のために序を書いた人の中に、張起南と同郷である桐城派古文家・翻訳家の林紓^{りんじよ}(1852-1924年)がいる。林紓は当時『小説月報』において、漢文体で外国小説を翻訳することで名高い文化人であった。張起南とは同じ地域の出身ということで、恐らく学縁的な繋がりを持っていたのだろう。もう一人の序文作者は同光派詩人の陳衍であり、彼もまた福建省の出身である。彼は序文の中で、自分も少年であった頃に文義謎を愛好し、自作の文義謎は張起南と似たような作風だったと告白している。さらに、

それは文字学の方法を用いて文字の意義を転化させており、経典が今文学家と古文学家に読まれる場合に意味が異なるのと同じく、上下の句読を移動させているからこそ、意表をついた変化をし、日々無窮なアイディアを出すことができるのだ。⁽⁶⁾

と文義謎のメカニズムに関する叙述もしている。『橐園春燈話』は、林紓と陳衍のような当時の文化界における有名な人物に序文を書いてもらうことで、他の謎話本より高い宣伝効果が得られた部分もあったのではないだろうか。

『棗園春燈話』の最大の特徴は、作者自身の経験と作品とを中心とした叙述及び分析にある。創作理論を論じる前に、彼はまず自分が置かれていた地域社会の環境や、一人の謎人として成長してきた過程、及び自分の努力によって出身地以外の地域で文義謎ブームを引き起こした経緯などをかなり詳しく述べている。特に、科挙教育を受けた旧知識人の一員として、どういった流れで文義謎に出会い、それに魅了され、一創作者として文義謎ブームに身を捧げたかといった内容は、実は既出の他の謎話本にも謎書にも筆記類にも見られず、他の謎人が語らなかつたものである。『棗園春燈話』には、謎人の交流が生き生きと披露されている。

さらに、張起南は自分の創作に対して明確な理念を主張していた。つまり、「底と面の自然な対応関係を追求し、古人が言う「玉製の蓋で玉製の箱を覆う」ような謎こそが最も優秀な謎であり、謎面はなるべく成句を使うようにする」⁽⁶⁶⁾ ということである。彼は謎における「書家・江湖（文人・民間）」という区別を非常に意識していた。この「書家・江湖」についての議論は『邃漢齋謎話』にも見られるが、それは光緒34年（1908年）に創刊された雑誌『國學萃編』で、文義謎の投稿を募集する知らせの中にあつた「書家（文人）的構想の作だけを掲載し、江湖（民間）的なのは一切掲載できないことをご了承ください」⁽⁶⁷⁾ という言葉に由来すると考えられる。つまり、当時の謎人には、民俗的な謎と自ら一線を画する意識がかなり強く見られたのである。しかし、張起南が推賞する「玉製の蓋で玉製の箱を覆う」という創作方法には、一つ不利な点がある。それは、

謎面と謎底が自然に配合している文義謎の多くは、すでに前人に先取りされている。わざと剽窃したわけではないにも拘わらず、読者から見れば、どうしてもその疑いがあるように見える。⁽⁶⁸⁾

という問題である。このような現象について、張起南は「限りのある書が限りのない文義謎創作者に使われているため、重ならないほうが不自然だ」⁽⁶⁹⁾ と述べている。つまり、彼は典故成句を使う創作方法を高く評価し、推賞しながらも、それに伴う大きな限界を認識し始めたのである。その限界を克服するためには、文義謎創作の材料を伝統的教養から新時代の教養へと少しずつ移行させるか、または新しい創作方法を見つけて変化を求めるとしかなく、文義謎創作に対する理論的な思考が必要とされた。

五 新しい題材と手法

近代化が進む中、旧知識人が共有してきた伝統的知識をどう活かせるか、様々な試みが行われていたわけだが、新文化運動の時期に入ると、文義謎の中に新しく白話文体や西洋から伝来した「新学」の内容なども含ませようと、謎人らは試行錯誤を繰り返した。例え

ば、謎面は依然として儒家經典などを用いるが、解答のほうが近代的な名詞や時事に関するものになる文義謎も多く創作された。文義謎を通して、旧学と新学を繋ごうとする傾向が見られるのである。こうした近代文学・近代思想の要素が含まれる新しい形の文義謎の発生経緯を解明するための一次資料としても、謎話本は非常に重要だと考えられる。

亢聘臣の『紙醉廬春燈百話』は、文義謎の新しい動向について、近年では白話文体が流行しているため、白話で燈謎を創るのも新鮮であると書いている。また彼は、浙江省の謎人・許紹蘭らが半月形の燈籠を用いた燈謎を行い、燈籠を東西半球に分け、東半球には黄色い紙、西半球には白い紙を貼り付け、東半球に書かれる謎は伝統的内容を謎底にしたのに対し、西半球に書かれるのは新学、つまり欧米の学問知識を内容にしたものになっている、と他の地域で行われた新しい活動形式を紹介している⁽⁷⁰⁾。

1917年に王文濡が編集した『春謎大觀』の序文には、

近年に張起南君の『橐園春燈錄』があり、中では博学文雅なもの、または斬新なアイデアに長じた謎、或いは曲がりくねった奇抜な謎など、要するに全部が新しい機軸を出しており、旧来のスタイルを脱している。⁽⁷¹⁾

と書かれている。張起南は新時代に応じて、文義謎に入れるべき内容を詳しく分類した。科学のジャンルには、天文・地理・算学・図画(美術)・音楽・外国語などが入っており、政治のジャンルは外交・内務・財政・陸海軍・司法・教育・農商・交通などに分け、さらに時事のジャンルには総統・人材・政体・改革・文明・新政・経済・外患・内憂などが含まれている。彼が考えた「新機軸を出」す文義謎を挙げてみよう。

Morning 漢字一 譚⁽⁷²⁾

解釈：morningを「西」洋人が「言」う「早」朝のことであると解釈し、「言」「西」「早」の三文字を組み合わせると「譚」になる。

孫文反抗政府 左傳一句 中山不服(『春秋左氏傳・定公四年』)⁽⁷³⁾

解釈：孫文の字が「中山」であるため。

彼は謎かけが漢字文でなければならないという認識を根本的に覆し、また現に発生している大きな歴史的な事件を材料に、時代の流れを即時に記録し表現する手段として、新しい創作手法を試みたのである。さらに、彼は文義謎の創作を化学的過程に譬えている⁽⁷⁴⁾。それは、文義謎を創作する時の經典の使い方と一般の学問をする場合とはかなり異なっており、逆転する発想やインスピレーションが必要だからである。文義謎的思考法とも言えるこういった思考回路を持っていなければ、恐らく儒家經典などを謎の材料として認識する

ことは不可能であろう。つまり、化学的過程のように、本来の性質を変えることである。どんなに重要な思想が書かれている聖賢の経伝であっても、文義謎の材料にすれば、必ず本来の意義から離脱しなければならない。「故に古い観念を捨てきれずにいる人には文義謎の創作ができない」⁽⁶⁾と彼は強く主張した。

こうして、漢字・漢文自体の存廃さえも問題提起される中、文義謎は経学とほぼ同じ長い時間に亘って漢文学に依存しながらも、漸く自らの分野を確立し始めた。張起南などパイオニア的な謎人らが緊迫感を持ち、それぞれ文義謎を生き残させるための試みを行ったからである。

おわりに

中国伝統社会の二大転換期として、明末と清末には多くの類似性が見られることがしばしば指摘されるが、それらの文化的類似性の中、特に「今体謎」の発生・発展に関係するのは、儒学経典の下への普及（民衆化）、儒教文化に対する禅宗思想の侵入、老荘思想の再流行といった三種の現象であると考えられる。そして、文義謎が近代漢字文化の新しい分野として成立する過程は科挙教育と深い繋がりがあり、科挙教育から得た伝統的知識の蓄積と、本来科挙試験が持っていた文字遊戯的要素とが文義謎の潜在的な受容範囲を広めたのである。科挙が廃止された後、士大夫の道を捨て、文人、教育者または近代市民社会の中間層に当たる知的大衆に転身した旧知識人にとって、共有の知である科挙的教養の価値を継続させる手段の一つとなったのも文義謎であった。その背景には、漢字圏の近代化過程に起きた口頭言語（パロール）と文字表記（エクリチュール）の衝突と、漢字文化が置かれていた危機的状況が存在していた。

文義謎自体は新しい文学ジャンルと言えないが、その発展にはスタイルの固定化傾向が清末民初の時代に見られ、その内容及び活動方式の近代化も顕著であった。文義謎が一つの分野として成立し得たのは、歴史の長い漢字文化である文義謎を中心に、新しい文学ジャンル「謎話」と近代化された内容・活動方式が立体的な構造となり、清末民国期に形成されたからである。そして、最も重要なのは、以前の各時代に比べ、「謎話」という新しい文学ジャンルを通して、謎人らの主体性が著しい向上を見せたことである。この分野の形成は、謎人らが自覚的に伝統文化の危機に立ち向かい、自らのアイデンティティを追い求めた結果ということになる。その形成過程を整理し、考察して確認できるのは、漢字の表意性を土台にした文義謎が、漢字社会における伝統的教養を全面的に活用しながら、新文化との接触も行い、独自の領域を確立しようと進化してきた漢字文化の新分野だということである。文義謎にまつわるこの一連の進化過程は、中国文化の近代的激変を代表する五四新文化運動などの「主流」からは少し離れているが、それが一つの「支流」として、前近代的価値と近代的価値との衝突、さらには融合を体現していることは否定できない。

[注]

- (1) 錢南揚『謎史』上海文芸出版社, 1986年, 1頁を参照。
- (2) 宋代には、元宵節（陰曆正月15日夜に行なわれる祭）に燈籠の表面に文義謎を貼って当てさせるという遊芸ができたため、「燈謎」という名称が発生した。
- (3) 李開先『李開先集（下冊雜著）詩譚一卷』上海中華書局, 1959年, 1012頁。
- (4) 「謎必用燈, 不知何人作俑。古名「商燈」, 又曰「春燈」, 或呼爲「文虎」, 一曰「燈虎」, 而又疑其爲「燈糊」。虎字必有所本, 殆取以矢射之之義也。」徐珂『清稗類鈔』傳世藏書, 雜記4, 海南國際新聞出版中心, 1996年, 1421頁。
- (5) 吳修喆「言語遊戯から文字遊戯へ——漢字字謎の形成について」『伝承文学研究』第8号, 2009年3月, 42-54頁。
- (6) 鮑照著（錢仲聯增補集說校）『鮑參軍集注』上海古籍出版社, 1980年, 415頁。
- (7) 詩の各節行頭から意味のある単語や文が取り出せる詩のこと。
- (8) 『支那學』第3号, 弘文堂書房, 1924年, 565-581頁。
- (9) 『歴史と地理』第一卷, 史學地理學同友會編, 大鑑閣, 1917年, 648頁。
- (10) 立命館出版部, 1936年, 955頁。「謎格」は、文義謎を創作する際に使われる特殊なルール。
- (11) “Although riddles are both old and widely known in China, the Chinese have not paid much attention to them until recently. This neglect may be partly due to the fact that the Chinese scholastic tradition held ‘vulgar’ literature in low esteem” p. 67.
- (12) 題目が七文字という長さに揃い、七言律詩の一句といった形をとる文義謎のこと。1930年代後半から流行しはじめた「北派謎」はこの形式をとっている。
- (13) 錢南揚『謎史』80頁。
- (14) 同上84頁。
- (15) 毛子水『論語今注今譯』臺灣商務印書館, 1975年, 221頁を参照。
- (16) 史次耘『孟子今注今譯』臺灣商務印書館, 1978年, 14頁を参照。
- (17) 以上の二題は徐渭『徐文長逸稿』中國文學珍本叢書第一輯第四十六種, 上海雜誌公司, 1936年, 卷二十四「雜著・燈謎」364頁を参照。
- (18) 田汝成『西湖遊覽志餘』第二十卷「熙朝樂事」, 中華書局上海編輯所, 1958年, 355頁。
- (19) 劉侗『帝京景物略』上海遠東出版, 1996年, 103頁。
- (20) 張岱（屠友祥校注）『陶庵夢憶』上海遠東出版社, 1996年, 168頁。『千家詩』とは宋の劉克莊に由来する、村塾で童蒙の誦読に用いた詩の本。
- (21) 錢南揚『謎史』8頁。
- (22) 徐朔方『晚明曲家年譜・第二卷浙江卷』浙江古籍出版社, 1993年, 135頁。
- (23) 『三墳』『五典』は三皇五帝についての、また『九丘』『八策』はそれぞれ九州（中国全土）および八卦に関する伝説上の古書の名前。
- (24) 「稗官野史」は民間の小さくて目立たない事柄の記録。

- (25) 「凶史」は凶書と史籍, 「策籍」は言論行動を記録する文書, 「紀伝」は史書における本紀と列伝, 「注載」は典籍における注釈のことである。「稗官野史」とは対照的な官製の記録を指す。
- (26) 張雲龍『廣社』四庫全書存目叢書・子部一一九, 四庫全書存目叢書編纂委員会編, 齊魯書社, 1995年, 1-2頁。「日月燈」「照乘珠」「光明藏」は, いずれも仏教的な用語で, 「真実を照らす光」の意味を持つ。
- (27) 周密撰(朱菊如他校注)『齊東野語校注』華東師範大学出版社, 1987年, 卷二十・十七, 398頁。
- (28) 李開先『李開先集(下冊雜著)詩譚一卷』1012頁。
- (29) 錢南揚『謎史』73頁。
- (30) 木下鉄矢『「清代考証学」とその時代——清代の思想』創文社, 1996年, 85頁。
- (31) 梁啓超『清代學術概論』上海古籍出版社, 1998年, 7頁。
- (32) 秦春燕『清末民初的晚明想像』北京大学出版社, 2008年, 12頁。
- (33) 散逸したため, 原文は確認できず。
- (34) 俞樾「隱書」『春在堂全書』第三卷, 鳳凰出版社, 2010年, 346頁。
- (35) 滑稽と弁舌の才能で外交上の手柄を立て, 齊国に媚入りした淳于髡^{じゆんこうこん}のことである。
- (36) 『國語』「晉語」五に「有秦客瘦辞於朝, 大夫莫之能対也」(秦からの客が宮廷で瘦辞を使ったところ, 大夫たちには対応できる者がいなかった)とある。「瘦辞」とは「隱語」「謎語」の意味。
- (37) 梁の周興嗣が武帝の命で撰した韻文。4字1句, 1,000字から成る。初等教科書や習字の手本として用いられた。
- (38) 注(34)と同じ。
- (39) 尤袤『全唐詩話』王雲五主編叢書集成初編, 上海商務印書館, 1936年, 7頁。
- (40) 100題のうち, 書名3題, 人名23題, 『易經』2題, 『書經』1題, 『詩經』8題, 『周禮』1題, 『禮記』5題, 『中庸』2題, 『論語』10題, 『孟子』7題, 字15題, 年号2題, 地名2題, 葉は11題, 果物名1題, 詞調名3題, 曲調名1題, 『千字文』1題, 『西廂記』1題, 『聊齋志異編目』1題である。
- (41) 官本の反対語で, 民間の書店から出版された書物を言う。
- (42) その証拠となるのは, 『新編燈謎大觀』に収録される謎の多くが, 『隱書』よりも早い光緒2年(1876年)に出版された西山主人(本名は李澎)の編纂した『十五家妙契同岑集謎選』に見られることである。錢南揚『謎史』104頁。
- (43) 高伯瑜等『中華謎書集成』(三), 人民日報出版社, 1997年, 2012頁。
- (44) 宮崎市定『科挙史』平凡社, 1987年, 280頁。
- (45) 高伯瑜等『中華謎書集成』(三), 2200頁。
- (46) 周作人「關於試帖」『周作人散文全集7』広西師範大学出版社, 2009年, 254頁。
- (47) 小倉芳彦『中国文化叢書8 文化史』大修館書店, 1968年, 43頁。
- (48) 新聞の文芸・学芸欄, 特集頁のこと。
- (49) 唐振常主編『上海史』, 上海人民出版社, 1989年, 751頁を参考。
- (50) 鄭逸梅『梅庵談薈』黒龍江人民出版社, 1985年, 150頁。
- (51) 鴛鴦蝴蝶派とは清末民国期に流行していた恋愛小説の一派である。
- (52) 江更生・朱育珉『燈謎大世界』湖南文芸出版社, 1987年, 305頁。

- (53) 鈴木虎雄「文字の國（文字に関する支那人の日常生活）」『支那文學研究』弘文堂、1925年、689頁。
- (54) 高伯瑜等『中華謎書集成』（二）、人民日報出版社、1993年、1814-1854頁。
- (55) 謝曉霞『「小説月報」1910-1920：商業・文化与未完成的現代性』上海三聯書店、2006年、27頁。
- (56) 薛鳳昌『遂漢齋謎話』商務印書館、1917年、1頁。
- (57) 「謎話」の書誌情報について、蔡建榮主編『謎話匯編十八種』杏林文虎書齋、2011年、286頁は、「晨風閣叢書・甲集・謎話一卷、載『國學萃編』第二冊」とするが、北京図書館所蔵の半月刊『國學萃編』の書影を確認したところ、「謎話」は第1期及び第2期（1908年1月）に掲載されていた。また、『國學萃編』第1期目録の後ろに「晨風閣叢書第一集」という題字が見られる。
- (58) 以上の3冊の書名は江更生・朱育珉『燈謎大世界』182-186頁に見られる。
- (59) 『橐園春燈話』の中に「枕亞談虎錄」に関する記述があるため、『談虎偶錄』の完成時間が1915年以前だと推測できる。
- (60) 以上の5書の題名は趙首成・邵賓軍『古今優秀燈謎鑑賞辭典』瀋江出版社、1991年、832-842頁から。
- (61) 亢聘臣『紙醉廬春燈百話』敏社、1919年、跋。
- (62) 描線を主体として墨一色で描く中国画の技法であるが、ここでは飾り気のない作風を指す。
- (63) 薛鳳昌『遂漢齋謎話』9頁。
- (64) 「夫詩有別材，非關書也。詩有別趣，非關理也。然非多讀書，多窮理，則不能極其至。」嚴羽『滄浪詩話』、和刻本漢籍隨筆集第20集、古典研究會、汲古書院、1978年、350頁。
- (65) 「故非用小學通段之法，以轉移文字，與今古文家讀經各異之例，以上下句讀，亦安能出奇變化，日出而不窮哉。」張起南『橐園春燈話』（上）、福建省漳州市燈謎協會翻印、1986年、2頁。
- (66) 「余作謎主張典雅一派，必底面天然配合，如古所謂玉合子蓋玉合子底者，乃爲上品。面貴成語。」張起南『橐園春燈話』（上）、15頁。引用文中の「玉合子蓋玉合子底」とは、宋代の尤袤『全唐詩話』の中に記録されている唐代の詩人・劉昭禹の言葉であり、原文は「玉合子底，必有蓋，但精心求之，必獲其寶」とある。尤袤『全唐詩話』61頁。
- (67) 「書家意者方能照登，江湖意者恕不登錄。」徐珂『清稗類鈔』1422頁。
- (68) 「謎之底面天然者，前人已捷足先得。雖非有心抄襲，而見者終不免有掠美之疑。」張起南『橐園春燈話』（下）、福建省漳州市燈謎協會翻印、1986年、50頁。
- (69) 「以有盡之書供無窮製謎家之用，萬無不同之理。」張起南『橐園春燈話』（下）、50頁。
- (70) 亢聘臣『紙醉廬春燈百話』敏社、1919年、卷下。
- (71) 『春謎大觀』（萍社同人輯、王文濡序）、国立北京大学中国民俗学会民俗叢書、東方文化書局、1974年、1頁。『橐園春燈錄』は、既出の『橐園春燈話』とは別の文義謎作品集。
- (72) 張起南『橐園春燈話』（上）、28頁。
- (73) 同上29頁。
- (74) 同上20頁。
- (75) 同上21頁。